

お母さんって

蜜瀬かえで 著

いつもの教室。

いつものお昼休み。

いつもみたいに机をくつつけてみんなでお昼。

わたしの隣に玉置が座って、正面にはのんちゃん。その隣にかおり。

珍しく今日はコッペパンじゃなくて購買の焼きそばパンを頬張りながら玉置が言った。

それとイチゴオレ。

「今度、未佑ん家にお呼ばれするんだ」

なぜか得意げ。

この間、玉置にお誕生日プレゼントを届けるのに着いてきてもらった

「うちのお母さんがね、一度連れていらっしやいって」

「かおりは一度会ったことあるよ」

「まあ、ミユウとは同じ西区だしね」

「そっかー、かおりんも同じ西区だもんねー。で、どんな人だった？」

「かおりん言うな。……てか、『どんな』って言われても……わかりやすく言うなら、ミユウツー？ 見た目ミユウとよく似てるけど、顔立ちキリつとしてて、パラメータどれもすんごく高い、みたいな」

「よくわかんないけど、よくわかった」

「貴女、ゲームとかやらないからね。というか、そっちはそっちでなんでそんな照れてんのよ？」

「え、だって、『お母さんと似てる』なんて、うれしくってー」

わたしの目標は、お母さんみたいなカッコいい女性になることだし。

外見だけでも似てるって言われるのはすんごくうれしい。

「……マザコン」

「そんなことないって。普通だよ。ね、のんちゃん？」

「……私は、いいと思う。お母さんのこと大好きなのって」
そういつてじつと見つめるのんちゃんのお弁当は、こじんまりとしているけど、いつも手が込んで、『愛されてるんだなあ』って気がすごくする。

「タマは——って、訊くまでもないか」

自分のお母さんのことを思い出したのか、げんなりした

顔の玉置。

「そういえば、タマの家って、すごいきびしいだけ？
どんな人なの？」

「……シーラカンス」

「生きた化石かあ」

「髪染めるのもだめ。かわいい服もだめ。アクセもだめだし。デコるのもだめ。何でもかんでもだめだめだめ。しかも、自分の言うことは全部押しつけてくんだもん。もう、最悪」

「ご愁傷様」

「でも今は晴れて自由の身！ 髪染め解禁！ かわいい服着放題！」

「それでハメを外しすぎて入学式で一騒動。結果クラスでハブられて、お昼は普通科で私らと一緒に、と」

「ちよつと、かおり」

「いいもん。あたし、未佑がいるし」

「はいはい。おアツいことで」

だんだん暑さも強まってきた夏の昼下がり。